

## 中国書法史における趙孟頫の再検討

—《玄妙觀重脩三門記卷》(東京国立博物館)に書かれた文字の形と線質を手掛かりに—

根來 孝明(同志社大学)

趙孟頫(1254—1322)は呉興の人、字は子昂、松雪道人と号した。宋(960—1279)の王室出身だが、26歳の時に宋が滅び、元(1271—1368)に仕えた。当時から書に巧みなことで著名で、詩巻30点・尺牘77点・題跋文43点・石碑原稿12点が現存している。

従来の中国書法史において、趙孟頫は晋(265—420)の王羲之(303—361)や唐(618—907)の李邕(678—747)などの伝統的な様式へ回帰した人物とされてきた。近年、陳建志氏が『趙孟頫の書法における時期区分の研究』(2014)において現存作例を網羅的に整理し、様式変遷について考察した。陳氏は、趙孟頫はまず宋様式を学習し、晋・唐様式の模倣を経て、50歳頃の《玄妙觀重脩三門記卷》(東京国立博物館蔵、以下《三門記》)以降、独自の書になると指摘された。だが《三門記》の造形的特質については、同時代の鮮于樞(1256—1257)からの影響を示唆するに留まり、十分な分析は行われているとは言い難い。また陳氏の指摘はいずれも、趙孟頫は伝統へ回帰したという従来の書法史観の延長線上にあると言えよう。

本発表の目的は、《三門記》にどのような特質があるのかを造形分析を通して解明することによって、趙孟頫の書に単なる伝統回帰以上の意味合いを見出すことにある。そのために以下の手続きをとる。

第1章で、まず《三門記》の概要を確認する。次に《三門記》を、紙面における文字の配置、文字の骨格構造としての字形、骨格を肉付ける線の肥瘦などの特質、3点から分析し、以下の特質を明らかにする。すなわち、字形においては均衡な字と不均衡な字が、線においては一字に直線的・鋭角的で硬質な線と過剰な肥瘦がある柔和な線が、それぞれ共存することである。第2章では、《三門記》が石碑原稿であることを踏まえて、均衡のとれた字形と硬質な線は、晋・唐以来、公的な場で用いられた石碑と類似することに着目し、この点が伝統への回帰と解釈されてきたことを指摘する。その上で第3章では、その不均衡な字形と柔和な線が石碑に適さないことに着目し、張即之(1186—1266)や黄庭堅(1045—1105)といった、毛筆の柔軟性を従来以上に生かすことで伝統から逸脱する字形と線を実践した宋の書に類例を見出せることを明らかにする。このことから、《三門記》には伝統への回帰だけではなく、趙孟頫が若年期に学んだ宋様式が表れていると指摘する。

以上のことから、《三門記》には晋・唐以来の伝統に依る字形と宋様式に類似する不均衡な字形、一字の中に石碑に適した硬質な線と毛筆の柔軟性を生かした柔和な線が共存することを明らかにする。すなわち趙孟頫の書は、均衡を重視した字形と硬質な線によって伝統への回帰を表面的に実現しながらも、その基底には伝統から逸脱しようとする宋様式がなければ成立し得ないものであると結論づける。